

# 私の主張：高等教育のあるべき姿

## 大学教育における産学連携教育の位置づけ

九州大学学務企画課専門員

李 麗花

高等教育のあるべき姿として以下のようにまとめる。

1. 受験中心の学習から課題探究型の学習への切り替えが重要である。社会に起こる様々な課題は、受験勉強のように答えが明確なものではなく、答えのない課題であり、課題探究型の学習へと取り組むことにより常に新しい発見・発想が生まれてくる。こうした学習モードの切り替えに向けた方策として何がなされているか。取組と効果の現状を確認し、必要な改善策を練る必要がある。
2. 入学時に専門が細かく決まっている学部が多いため、自分の専門以外の分野に対する学習に意欲を持っていない場合が多い。いかに幅広い学問分野に対する関心と意欲を育てるか。自身の専門分野に留まらない幅広い見識に基づく先見性が求められる現在においては、社会、人間、自然に対する全般的な関心と学習意欲を育てることである。
3. 就職を念頭に置いたキャリア教育も重要であるが、自分の専門を軸に据えながら、知的な学習に対する関心をいかに育てていくかが、大学としての基本的課題になる。

このように、上記の高等教育課題の改善策として、産学連携を通じた人材育成が一つの有効な対策であると考えられる。従来における産学連携教育はキャリア教育の一環として位置付けられていたものが、現在においては、そこに留まらず社会の幅広い領域で展開しつつある。とりわけ、技術革新が急速に進む中、企業内再教育では補えなく、従来の自前主義による人材育成にも限界が生じる。そうした、社会課題に分野の垣根を超え、新たな価値を創造していくことが、今、大学に求められている。このような社会課題に取り組むためには知識の普及だけでなく、学生の現場体験や実際の現場での実践可能な教育課程が求められるし、さらに、大学を新しい社会モデルを先行実施する場の提供での人材育成が必要である。それにより、学生たちは、思考や知識を働かせ、「知」を総合化し実践化する。

しかし、従来の高等教育は専門分野の細分化と深化が進んでおり、周囲の専門分野を見渡すことは難しい。産学連携教育は、学生が自分の専門分野が社会にどのような役割を果たし、また、自分の専門分野以外にどの分野との融合で一つの課題が解決できるのかを経験させ、社会の取り巻く様々な課題を解決出来る役割を果たす。そのため、学生は産学連携教育を通じて、自分の専門分野の知識をどのように活用するのかを身をもって実体験できるし、さらに、問題発見・解決力、実践力等を身に付けることができる。すでに多くの大学では産学連携教育が実施されているし、これまでの大学教育にはみられなかった新しい試みが多く存在している。産学連携の要素を大学教育に取り入れることで大学教育の新たな展開の可能性が開ける。そのため、産学連携教育で獲得した能力は従来の大学教育によって習得される知識とどう融合されるかを検討し、産学連携教育が大学教育の中でどのような位置づけになるのかは大学教育改革の上で重要である。